

多様な子どもたちが仲間とつながり共に楽しむ園生活

～一人一人が安心し、自己発揮して遊ぶ環境の工夫～

糸満市立真壁こども園保育教諭 呉 我 恵

I テーマ設定理由

子どもたちを取り巻く社会環境は、日々変化している。その多様な社会で育った子どもたちは、それぞれ異なる考え方や感じ方、経験を持っている。近年、担当した5歳児クラスでは、発達に支援を要する子のほか、日本語が話せない外国籍の子や、家庭環境に配慮が必要な子など、支援を要する子どもが多く、その内容も多岐にわたっていた。これまでの自己の保育観と就学前の育ちを踏まえて保育展開を試みたが、一人遊びが多く、友だちへの興味・関心がなかなか深まらないなど「5歳児としてどう育てていくか」と悩んだ。そのような状況で、保育教諭同士の情報共有や、エピソード記述を基にした話合いが役に立った。話合いのおかげで自己の保育を俯瞰し、子どもの姿を多面的・連続的に見ることができ、一人一人の姿を肯定的に捉えて支援を要する子への対応を変えることができた。

本園は、0歳から就学前(満6歳)までの多様な背景と発達の特性を持つ多様な子どもたちが、共に遊び、互いに学び合って生活しているため、保育教諭間や職員間の協働が不可欠となっている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(以下「教育・保育要領解説」とする)第1章「総則」第1幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等には、発達や学びの連続性及び生活の連続性の観点等を柱とし「園児一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを常に考えることが大切である。」と述べられている。幼児教育・保育が大切にしている一人一人を生かした集団を、多様な子どもたちが集まりその内容が多岐にわたる現状において、それを実現するにはどうすれば良いのか、自己の保育に足りないものは何かを考え、これまでの実践を振り返り見直したいと感じるようになった。そのような折り、こども家庭庁を中心とした政府において「はじめの100か月の育ちビジョン」が閣議決定された。身体・心・社会(バイオサイコソーシャル)全ての面での幸せの向上にとって、胎児期を含めた7歳頃までが特に大切な時期と明記され、育ちの鍵となる「安心」についての重要性が記されている。園生活は子どもにとって初めての集団生活であり、家庭と同じくらい長い時間を園で過ごす子どもも多い。0～1歳児クラスを複数担任で受け持ったとき、目の前で美味しそうに食べる保育教諭の姿を見て、乳児が安心して食材に手を伸ばす姿から、安心・信頼できる人がいるからこそ、主体的で意欲的な行動が沸き起こるのだと学んだ。このような学びと経験から、一人一人が自分らしさを保育の中で発揮できていることや、園生活が「安心」できる場となることの重要性を感じた。そして、多様な背景や発達の特性にとらわれず、安心して過ごせる環境と信頼できる人がいれば、子どもは主体的に活動し自己を発揮して遊ぶことができるのではないかと考え、改めて保育教諭の役割、子ども理解と援助について深く学びたいと思うようになった。また、子どもを集団に入れて適応させる方法ではなく、環境の工夫によって仲間とつながり、互いを認め合う経験や共に遊ぶ楽しさを積み重ねることで、他者理解が深まり合う。このような循環が生まれ育まれることが、仲間とつながる集団の構築になるのではないかと考えた。

そこで本研究においては、一人一人が安心して自己を発揮して遊べるための環境の工夫を探り、多様な子どもたちが仲間とつながり一人一人が生き活きと共に園生活を楽しむ集団になることを目指し、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

多様な子どもたち一人一人の理解を深め、一人一人が安心して自己を発揮しながら遊び、仲間とつながり共に楽しむ園生活となるための環境について、実践を通して研究する。

Ⅲ 研究方法

- 1 一人一人が仲間とつながる過程について、先行研究や法令をもとに学ぶ。
- 2 一人一人が安心して自己を発揮できる環境と園生活について探る。
- 3 子ども理解を軸にした環境づくりを保育実践し、その結果を分析・改善する。

Ⅳ 研究内容

1 「仲間とつながる」過程に大切なこと

(1) インクルーシブ保育と幼児教育・保育

「教育・保育要領解説」で述べられている「園児一人一人をかけがいのない存在として」という幼児教育・保育の考え方は、「一人一人違って当たり前」「その子らしさを大切にする」といったインクルーシブ保育の視点や子どもの権利条約、こども基本法にも関連してくる。インクルーシブ保育とは「包まれる・含まれる・一体」を意味する

「inclusive」に由来し、障がいの有無にかかわらず、一人一人が異なることを前提とし、その子らしさを大切にしながら、共に育ち合うことを目的とする考え方である。気をつけたいのは、統合保育と類似していることだ。統合保育は、一般的な発達を規準とした保育に子どもを適応させようとしたり、単に同じ場にいることを目的としたりするが、インクルーシブ保育は、それぞれの子どもの特性や発達に応じて保育や環境を変えながら、共に育ち合うことを重視している(図1)。この、「特性や発達に応じる」という考え方は、幼児教育・保育の「一人一人の特性や発達の過程に応じた保育」の考えと重なる。「教育・保育要領解説」には「発達に関する平均や類型は参考にすぎない」とあり、園児がどのようなことに興味・関心をもってきたか、友達との関係の変化など、園児一人一人の発達の実績を理解することが真の意味での発達理解だとある。佐伯(2013)は、子どもの「今」を大事にすることを花に例え「花になってくれるから大事にするのではなくて、『今』、この種は、種として必死に生きようとしている。それを大事にしましょう(中略)望ましい姿を想定して大事にするのでは、大事にしようとする感覚が違ってくる。」と述べている。そこで本研究では、年齢や背景の枠組みにとらわれず、発達の実績と子どもの「今」を大事に、インクルーシブの視点で保育に携わっていく。

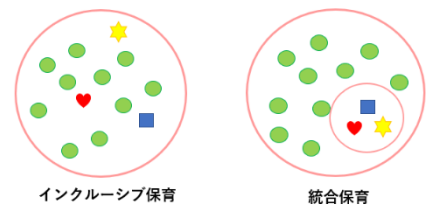


図1 インクルーシブ保育
(みんなにやさしい
インクルーシブ保育を基に作成)

(2) 仲間とつながり共に育ちあう

教育・保育要領第2章ねらい及び内容、人間関係、3内容の取り扱いでは「(2)一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、園児が自己を発揮し、保育教諭や他の園児に認められる体験をし、自分の良さや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。」と記されている。そして「教育・保育要領解説」には子どもたちは集団生活の中で育つこと、育ち合う集団となるためには園児一人一人にとって安心して十分

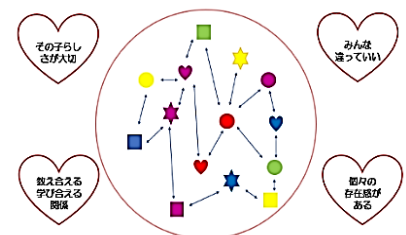


図2 個と集団の育ちの相互作用
(保育内容 人間関係を基に作成)

に自己発揮できる場が重要と述べられている。岩立・西坂(2021)は「集団が温かく、豊かであるから、個々の子どもが育つ。個々の子どもが育つから集団が豊かになる。個々の子どもと、集団としての子どもとが相互に作用しながら育ち合うことが大切である。」と記されている(図2)。そこで本研究では、自分の良さや特徴に気づき、自信をもって行動し、仲間と育ち合う集団となるよう、子ども一人一人にとって安心して十分に自己発揮できる場となる環境の工夫を実践していく。

2 「安心」して自己発揮ができるとは

(1) 安心できる環境

「はじめの 100 か月の育ちビジョン」には、「安心と挑戦の循環」とあり、「乳幼児期の安定したアタッチメントは、子どもに自分自身や周囲の人、社会への安心感をもたらすこと、その安心感のもとで子どもは『遊びと体験』等を通して外の世界への挑戦を重ね、世界を広げていくことができる」と記されている。安心が土台となり挑戦(自発的な遊び)へとつながるのだ(図3)。アタッチメントは単なるスキンシップ(皮膚接触)とは異なり、大人には役割がある。怖くて不安なとき、感情が揺らいでいるときにそれをしっかりと共感的に受け止め、安心感を回復させる「安全な避難場所」としての役割や安心感を得た子どもが、自ら探索や冒険に向かえるよう背中を押し見守る「安心の基地」としての役割である。大人との関わりを通して、子どもたちは、基本的信頼を育み自発的な探索や冒険、新しいことへの挑戦を重ねていく(図4)。アタッチメントの形成は、家庭(保護者・養育者)だけでなく、子どもが密に接する特定の身近な大人も重要な役割を果たす。そこで本研究では、この時期に出会う保育教諭との愛着や信頼も、挑戦する姿の土台になると考え、人的環境として重視していく。そして、安心して自己発揮する姿を自分の思いや考えを伝える姿や、好きな遊びを主体的に楽しむ姿だけでなく泣く怒るなど家庭と同じような自己表現も、安心して自己発揮できている姿と捉え、安心できる空間・人的・物的環境の工夫をしていく。

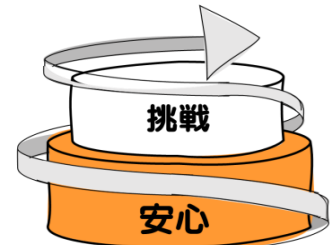


図3 安心と挑戦の循環
こども家庭庁より

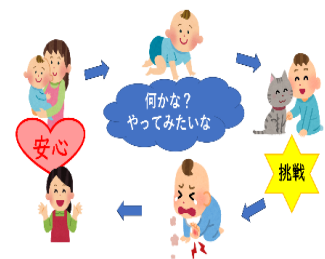


図4 安心の輪(Circle Of International を基に作成)

(2) 保育教諭等の協働～チーム保育～

内閣府・文部科学省・厚生労働省発行の「幼保連携型認定こども園における園児が心を寄せる環境の構成」(以下「環境の構成」とする)では「複数の保育教諭等が園児一人一人や教育及び保育の一つの場面について話し合いを行うことにより、保育教諭等の自身の振り返りでは気づかなかった園児の気持ちや行動の意味を理解することが可能となり、それが教育及び保育の質の向上につながっていきます。」とある。そこで本研究では、この質の向上につながる話し合いは、園児にとって複数の保育者に見守られている安心感となり、安心できる園生活の場に必要だと考える。そして日々多面的に子どもの姿が捉えられるよう、記録やドキュメンテーションを子ども同士や保護者との情報共有として活用するだけではなく、保育教諭等同士の連携にも活用していく。

3 「子ども理解」を軸にした環境づくり

(1) 環境を通した保育とは

「環境の構成」には、「園児を理解することが実践の始まりであり、そこから、園児一人一人の発達を着実に促す『環境を通して行う教育及び保育』が生み出されていくと考えられる」とある。さらに、指導の過程を振り返り、教育及び保育を見直すことが適切な環境を構成していくために重要であるということが述べられている。本研究においても、エピソード記述や日々の記録を基に子ども(園児)理解を深め、それを軸として環境の工夫を実践していく。

(2) 子ども理解

文部科学省発行の幼稚園教育指導資料第3集「幼児理解に基づいた評価」では「幼児を理解する

とは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指している」と記されている。また、幼児の姿から「その幼児をそう見ている自分自身」や「自分の保育の在り方」と併せて見直す姿勢が必要とある。そこで本研究では、エピソード記述や日々の記録で子ども理解を深めるとともに、自己の保育を振り返り、子ども理解を軸とした環境となっているか検証していく。

(3) 「SOAP」の視点

SOAP は、「子ども理解を起点とした」記録方法であり、保育実践における4つの視点が明記されている(表1)。河邊(2021)は「SOAPを視点に子どもの遊びを記録することで理解を起点にして次の保育を構想するという対話的な保育のデザインが意識化される」と述べている。また、遊びをエピソードとして記述し、記録を読み返す視点としてSOAPを活用するやり方も有効としている。そこで本研究では、このSOAPの視点に研究テーマの視点も取り入れ記録や振り返りに活用していく。

表1 「SOAP」の視点(これからの幼児教育を基に作成)

	SOAPの視点	本研究での主な視点	
【S】 幼児の姿 (主観的データ)	・だれとだれが、どこで、何をして遊んだか ・どのような人間関係が見られたか ・環境とどう関わっていたか ・どのような道具を使っていたか	○お気に入りの場所や、気の合う友達はいるか ○友だちと、関わって遊ぶ姿はみられたか ○お互いに思いや考えを伝えあっているか ○自分から好きな遊びをみつけ楽しんでいるか ○試行錯誤して遊ぶ姿はみられたか	幼児理解
【O】 読み取り (客観的データ)	・どこに面白さを感じていたか ・どのような経験をしていたか ・何が育っていると考えられるか 「遊び課題」と「人間関係」の2つの面をみる	○保育教諭との信頼関係はどうか ○友だち同士で互いを認め合っているか ○遊びが充実するような環境となっているか ○イメージを共有して遊ぶ楽しさは味わえているか	
【A】願い (アセスメント評価)	・どのような成長につながりそうか ・次はどのような経験が必要になるか		理解に基づいた援助
【P】 (計画)	・次の成長を促すためにはどのような環境や活動が必要か ・どのような援助が必要か	○明日につながる環境	

(4) エピソード記述とドキュメンテーション

エピソード記述とは、鯨岡(2007)によって提唱された記録方法で、保育者の心が揺さぶられた場面、保育者が描かずにはいられないと思った保育場面を記述したものとなる。本研究では、このエピソード記述を描きSOAPの視点で振り返ることで、一人一人の子ども理解を深めていくとともに、子どもの育ちに必要な明日につながる環境を探っていく。また、子どもの学びを写真や動画・音声を使って見える化するドキュメンテーション記録(図5)を、子ども理解の記録としてだけでなく、子どもたち自身が学びを振り返る環境としても活用する。さらに、保育教



図5 クラスで活用したドキュメンテーション

論同士の共通理解や保護者への発信など、子どもの育ちを多面的に捉える人的環境の広がりにも活用していく。

V 研究実践

1 SOAP の視点でエピソードを振り返り、子ども理解を軸にした環境の工夫

2 検証の視点

- (1) 一人一人の子ども理解を深め仲間とつながるための環境となっていたか。
- (2) 一人一人が安心して、自己を発揮して遊ぶ姿はみられたか。

3 検証保育前の背景

園では毎年ムーチャー作りを園行事として楽しんでいる。例年、年明けすぐのことが多く、あまり興味・関心を深める時間がないまま行事の日を迎えてしまうことが多い。ムーチャーや伝統行事に興味・関心を深めてほしい思いと、どの家庭にも浸透した話題になりやすい行事であることから、一人一人の子が、自分なりの思いや考えを出せる良い機会となるのではないかと願い、本研究の検証場面に取り入れた。

4 検証保育の全体図

環境が整うと、子ども達はキーワードとしてムーチャーをイメージし、そこから仲間とつながり共に楽しむ中で遊びを深め広げていった(図6)。

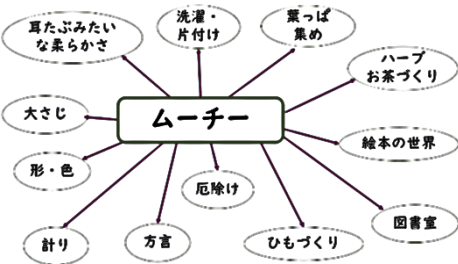


図6 ムーチャーづくりから広がる遊び

5 検証保育

(1) エピソード1 安心して自己発揮するAさんが仲間とつながる

S子どもの姿	O読み取り	A願い	P環境 (○物的★人的◇空間)
(クラスの姿) ・3歳児クラスのときからムーチャー作りを経験してる。 ・葉に包むことは知っているが、葉の名前が分からない。 ・食べる理由(由来)もはっきりしていない様子。 ・色々な色のムーチャーを食べたい子が多い。 ・終業式でもムーチャーづくりについて話していたため、すぐにイメージして材料や葉について話していた。	1月6日(月) ・みんなでムーチャーのイメージを出し終えた後、Aさんが私の所へ来て「ねぇ7がつ(7日)に食べたい」と言ってきた。 ・「いいアイデアだね! 食べよう」と返すと嬉しそうに笑った。 ・他の子がAさんと私とのやり取りを聞きクラス全体に伝えようとする。 ・クラス全体に伝えようとするが上手いかず、私に助けを求める。 ・皆が賛成してくれたことを喜ぶ。	私との信頼関係があるから自分の考えを伝えに来たのかな。 自分のアイデアが認められて嬉しい。 なんて言えばいいのかわからない。緊張する。 認めてもらえて嬉しい。 Aさんの思いを皆にも聞かせたい。 私だけでなく友だちにも認められる経験をしてほしい。 伝わる嬉しさを味わってほしい。 Aさんから始まったことをみんなに知ってほしい。	(事前準備) ○◇月桃は園内(玄関近く)にあるため、探す楽しみが味わえるようあえてクラス内に用意しない。 ○カレンダーに行事の予定を書き込みムーチャー作り(行事)があることを知らせる。 ○子どものイメージするムーチャーを言語化していくウェビングマップは大きめの紙を用意したくさんの気づきが記入できるようにする。 ★Aさんの思いを認め、クラスのみんなにも言うてみよう提案。Aさん発信でムーチャーづくりが楽しめるようにする。 ★他の子に待ってもらいAさんが伝えた方が良い理由を話す。 ★Aさんに確認して、私と一緒にクラス全体へアイデアを伝える。 ○★伝えられたことを認めたりウェビングマップへとAさんとアイデアを記入する。

・着替え後すぐに園庭でムーチーを包むための葉を探す。 ・自分の知っている葉を自分の言葉で説明しようとする。 ・他の子が飽きて別の遊びに行っても探し続ける。 ・フリー保育教諭に葉の場所を聞く。 ・あったかも！と言って走り出す。 ・Aさんの行動に気づき集まってくる。 ・周りに説明して葉の近くへ行き、引っこ抜こうとする。しかし、抜けずどこかへ行く。 ・ハサミを持って来て葉を切る。他の子にハサミを貸す。 ・サークルタイムで葉を見つけたことを話す。	・色や形をヒントに葉を探している。葉の名前はうる覚えだがイメージしている葉を宝探しのようにワクワクしながら探している。 ・葉が見つかって嬉しい。 ・早く欲しい。必要な道具が分かり、自分で準備する。  ・緊張するけれど自分なりに伝えようとしている。	・できるだけ自分の言葉で思いや考えを表現してほしい。  ・周りにAさんの気持ちや嬉しさを伝えたい。 ・Aさんのアイデアや積極的な関わりに、周りにも気づき仲間とつながってほしい。 ・別で遊んでいた子とも気づきや楽しさを共有してほしい。	★どんな形？大きさは？などの質問をし、互いのイメージが共有できるようにする。 ★フリー保育教諭は、事前に情報共有していたので、はっきりとした場所は教えずヒントを話す。 ★Aさんに質問して周りにAさんの遊びを知らせる。また、周りからの「なにしてるの？」などの質問はAさんが答えるよう援助する。 ★Aさんの一生懸命探した姿や見つけた喜びに共感すると共に周りにも伝えていく。 ○ドキュメンテーションへの記入だけでなく、葉を画用紙に貼り、みつけたAさんの名前を書いてクラス内に掲示する。 ○◇今日の振り返りをおこない、仲間同で遊びの楽しさや気づきが共有できるようにする。  ★事前に紐の作り方の話を園長先生に教えてもらい、子どもたちの遊びが広がったらすぐに取り入れられるように準備しておく。 ○Aさんに確認しながら前に採取した葉と同じように画用紙に貼り掲示する。 ★みんなで職員室に行くが、欠片を持ってAさんが園長先生に質問する場を設ける。 ○園長先生から玄関にある月桃の茎付き葉をもらう。 ○紐づくりに必要な道具を準備。 ○安全に遊べるよう場を考える。 ★紐を作っているときの香りや、手触りに興味・関心が持てるよう言葉かけをする。 ○気づきをウェビングマップに書く。 ○Aさんの気持ちを聞き、ウェビングマップやドキュメンテーションに書く。 ★サークルタイムで思いや考えが伝えやすい雰囲気づくりをする。
1月7日・8日・9日 ・Aさんは友だちとムーチーづくりに参加し試行錯誤しながらムーチーづくりを楽しむ。(クラスの姿) ・前日に図書室からかりた料理本に月桃の紐で結ばれたムーチーの写真が載っていた。 ・これは、いったいなんなのかな？と疑問が生まれた。 ・園長先生に聞いてみたい子がいる。			
1月10日 ・Aさんがミジョーキーの欠片が紐に似ていると気づき嬉しそうに見せる。 ・園長先生に紐の作り方を教えてもらい、月桃をもって嬉しそうにクラスへ向かう。 ・友だちに紐づくりの説明をする。 ・みんなと交代しながらハンマーを使い月桃の紐をつくる。 ・乾かしている間もよく見ていた。 1月14日(行事の日) ・月桃の紐でムーチーを結び満足そうに持ち帰る。	・自分の気づきを他者にも知らせたい。 ・自分の気づきが認められて嬉しい。 ・茎の変化やどう紐になるのか興味がある。 ・自分で作った嬉しさを味わっている。	・遊びが繰り返し楽しめるいつでも楽しめる経験を重ねたい。 ・他の職員に認めてもらう嬉しさを味わってほしい。 ・気づいたことを伝え合うと、遊びがさらに楽しくなる経験を増やしたい。 ・Aさんの気持ちを言葉や表情で自由に表現してほしい。	○Aさんに確認しながら前に採取した葉と同じように画用紙に貼り掲示する。 ★みんなで職員室に行くが、欠片を持ってAさんが園長先生に質問する場を設ける。 ○園長先生から玄関にある月桃の茎付き葉をもらう。 ○紐づくりに必要な道具を準備。 ○安全に遊べるよう場を考える。 ★紐を作っているときの香りや、手触りに興味・関心が持てるよう言葉かけをする。 ○気づきをウェビングマップに書く。 ○Aさんの気持ちを聞き、ウェビングマップやドキュメンテーションに書く。 ★サークルタイムで思いや考えが伝えやすい雰囲気づくりをする。

その後 ・ムーチーづくりには参加せず、ムーチを結ぶ紐（長い草）が園庭にないか探して楽しむ。 ・草の強度や長さ比べをしたりして、ムーチーに合う草を探す。 ・採取した草を自分の好きな色の画用紙にはりつけていく。 ・石入りムーチーを直している友達をみて手伝い、集めた草で自分もムーチーを作る。	・最初に楽しんだ葉を見つける遊びがもう一度やりたいのかな。 ・自分の気づきを認めてもらったことが嬉しかった。 ・ムーチーつながりで友達が一生懸命やっている遊びにも興味を持った。	・繰り返し楽しみながら、気づきが新しい遊びとなる経験を重ねてほしい。 ・自分の楽しいが友達の楽しいにもつながる（認め合う）体験を重ねてほしい。	○集めたものが入るような箱を準備（Aさんが必要なだけテラスにおいておく）。 ○初日に採取した葉を張り付けたような画用紙を用意 ★Aさんと一緒に草を探しながら、草の違いに気づけるよう言葉かけする。 ○Aさんが作った画用紙に名前を書いて掲示する。 ★互いの遊びが交わった嬉しさや、協力して作った楽しさに共感すると共に、仲間がいる心地よさへとつなげていく。 
--	--	--	--

(2) 考察

遊びの中心となることが少ないAさんが、自分の気づきが認められたこときっかけに、積極的に環境と関わって自分なりに遊びを発展させ、繰り返し楽しんでいる姿をみることができた。また、葉や紐といった自分の集めた物が掲示され、友だちがそれを遊びに使ってくれたことは、Aさんにとって認められた経験となっただろう。安心した環境で自分の好きな遊びを主体的に楽しむとその楽しい雰囲気や真剣な眼差しに引き寄せられ子どもたちが集まり、新しい遊びが生まれていた。

(3) エピソード2 互いを認め合って協力するYさんとXさん

S 子どもの姿	O 読み取り	A 願い	P 環境（○物的★人的◇空間）
（クラスの姿） ・行事とは違う日だが「明日ムーチーが食べたい」という声からムーチー作りをすることになった。 ・「粉」「水」「もち」「黒糖」などと材料を知ってはいるがはっきりとは分からない様子。 ・水はいつも水筒の補充で使っている冷水機を使う考えがでたが、ボールに入れる際の調整が難しくべちゃべちゃになった。 ・YさんとXさんのペアは、水を調整した方がよいと気づき、冷水器の水をちょっとだけ入れる方法を考えた。 ・2人はなんとか固めたムーチーを葉で包むことができた。			（事前準備） ○ドキュメンテーション （保護者や保育教諭にも活動が伝わるよう玄関先とクラスにおく）。 ○子どもたちの声から出た材料を購入しクラスに飾る。 ○ボール（考えを出し合い、関わりが持てるよう2人1つの数を準備）計りなど、作るのに必要な物はまだ声がなかったため、予想して別室に準備し子ども達から声が出たらすぐ取り出せるようにしておく。 ★厨房職員との関わりがもてるよう連絡しておく（用意した道具を預けておく）。
1月7日（火） ・多くのペアが失敗する中、2人のムーチーがなんとか形になったので喜んでいる。 ・クラスでの振り返りで、「どうして？べちゃべちゃになったの？」の問いかけにYさんが答える。	・「自分たちだけ」という特別感を味わっている。 	・協力した楽しさや嬉しさを表現し仲間と共有してほしい。 ・Yさんが気づいたことをみんなで共有しムーチー作りの工夫へと繋げたい。	★2人の気持ちに共感すると共に、協力した楽しさなどを言葉で表現し仲間のいる心地よさを感じられるようにする。 ○★Yさんの言葉を認めウェビングマップに記入し、全体で共有していく。

・Y「しってるよ。水いれすぎだから！」 ・すると他の子が「(自分達も) ちょっと入れたよ」と言う。少し困った表情のYさん。 ・X「Xなんかめっちゃちょっとしかいれなかったよ」とすぐに返す。	・成功した経験で自信をもって話している。 ・Yさんを助けてくれたのかな。	・Xさんの良い姿をゆっくり認めたいが、話し合いが続いて難しい。 ・協力し合う楽しさをこれからも経験してほしい。	★話し合いの後にこのときの姿を具体的に言葉で表現し認める。 ○★Xさんの言葉もウェビングマップに記入する。 ★2人の感じている気持ちを言葉で表現するなど、共感していく。 ★2人が言った言葉を繰り返したり書いたりする。
・Y「まずちょっと入れてまぜて(ここからXさんも一緒に話す) もういかいちょっといれて、まぜてまたちょっといれてまぜた」言い終わると見詰め合って笑う2人。 ・「ちょっとってどれくらい？」と質問ができた。今度は2人で説明しようとする。 ・Yさんの考えで冷水器へ行き、“ちょっと”をみんなに見せる。 ・ちょっとの水の出し方を練習する子がいた。明日はこの“ちょっと”の水を参考にムーチャーづくりをすることが決まった。	・なんだか2人だけの特別な呼吸でつながっているみたい。互いの気持ちに通じて嬉しそう。 ・1人で答えるより2人でだと安心。 ・2人で自信を持って伝えたり見せたりする。	・相手に伝わる方法も考えられそう。 ・2人だから上手くいったことに気づき、協力して遊ぶ経験につなげた。	★言葉だけでは難しいなど、伝える方法のヒントになる言葉かけをする。 ★互いの思いや考えを取り入れて協力できたことを認め、仲間と過ごす楽しさや嬉しさにつなげていく。 ★気づいたことが、明日の遊びへつながる楽しさとなるようドキュメンテーションやウェビングマップに記入していく。



(4) 考察

YさんとXさんは2人だけで遊ぶことは少ないが、この日は互いの思いを受け入れ仲良く楽しむことができた様子だった。ムーチャーが形になった嬉しさや、協力した楽しさが、2人の笑顔につながったと思う。Xさんはどんな活動にも積極的に発展させる力があるが、負けん気の強さから思いを強く伝えてしまうこともあった。そういったイメージが、このようなアイディアを出し合い、協力した楽しい経験を通して、良い姿や肯定的なイメージに変わってほしい。YさんとXさんの見詰め合って笑う姿から、保育教諭が言葉で伝えるその子の良さよりも、遊びの中で感じた互いの良さやつながる嬉しさが何倍も子どもの心に響くと感じられた。子どもの心が動いた瞬間を逃さないよう、子どもたちともっと関わっていきたいと思った。また楽しい思いに共感する、2人が上手かった理由を言葉で表現するなど、保育教諭が関わる中で様々な役割を果たしていくことが重要だと改めて感じた。

(5) エピソード3 イメージを共有して楽しんだ遊びがみんなにつながる

S子どもの姿	○読み取り	A願い	P環境 (○物的★人的◇空間)
(クラスの姿) ・ムーチャー作りを楽しむ中で、絵本「鬼ムーチャー」に気がついた子がいた。読み聞かせをすると、Eさんが鬼を怖がった。 ・その姿をみたNさんが絵本のように『石入りのムーチャーを作って飾ろう』とアイディアを出し、翌日取り組むことになった。			(事前準備) ○◇園全体を環境として活用していくため、絵本部屋の季節コーナーにある『鬼ムーチャー』はそのままにして、クラス内には置かない。 ○絵本を見つけた子の名前を付箋に書き、目立つ場所に置く。 (前日準備) ○月桃の葉や紐を準備しておく ○ドキュメンテーションに記入して振り返られるようにする。

1月8日(水)

・Eさんは準備されていた月桃と紐をみるとすぐに園庭で石を集め始めた。

・Eさんの姿をみて、3人で遊んでいたCさん、Dさん、Bさんも集め始める。

・集めた石をテラスに広げると、Nさんが月桃を包み始めた。

・BさんもNさんの姿を見て包む。他の3人はまた石を探しに行く。

・Nさんが月桃を押さえながら紐が切れず困る。

・Bさんが気付き声をかけ、協力して紐を結ぶ。

・Nさんがお礼を言う。

・B「紐を切る人やろう」とNさんが包むのを待つて紐を切る。

※会話をしみながら作っているうちに、家庭のような雰囲気となる。

・石集めを終えてEさん達が「ただいま」と帰ってくると、「おかえり」と返事が返ってきて笑顔になる。

・NさんBさんと一緒に石を包む。

※紐を切る係や包む葉を押さえる、石が減るとまた拾いに行くなど、自分たちで気づき声を掛け合って役割分担をしている。

・作り終わると、どこに飾るか話し合いが始まる。

・色々な意見がでたが、Bさんの「絵本のようにミージョーキーにいっぱい入れたい」という考えにきまった。

・Bさんはそう考えた理由を「いっぱいをいっきにじゃないと鬼はあがー！ってならない」と説明していた。

・説明を聞いて、みんな納得した様子だった。

・鬼が怖い思いと友だちの考えを認めているからすぐに始めたのかな。

・昨日の出来事が共有できているので、Eさんの姿で何をしているのか分かったんだな。

・声を掛け合わなくても役割分担をして楽しんでいる。

・1人では難しいことに気づいた。

・友だちがいる嬉しさを感じられた。

・頼まれたことで、他の役割に気づき自分で考えた。

・掛け合いをして一緒に遊ぶことを楽しんでいる。

・自分で考え互いに協力しながら遊びをすすめている。

・1人で決めず、互いに考えを出し合っている。仲間と協力して作ったと感じている。

・Bさんは、自分の思いや考えをしっかりと伝えることができる。他の子も一緒につくったことで、興味を持ってしっかり聞いている。

・園庭で遊ぶ子テラスの子互いの遊びを感じながら楽しんでほしい。

・仲間となっているこの雰囲気を大切にしながら、一緒に過ごす楽しさが味わえるようにしたい。

・友だち同士で助け合ってほしい。

・互いに認めあえる経験を重ねてほしい。

・Bさんが自分で考え行動したことを自信につなげたい。

・友だちがいる心地よさを味わってほしい。

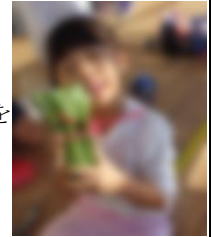
・自分たちで考えて遊びをすすめる姿を自信につなげたい。

・協力して作った楽しさや嬉しさをクラスでも共有したい。

・Bさんには聞いてもらえた嬉しさや、認めてもらった嬉しさを感じてほしい。



○◇温かい日差しが入り心地よいこともあり、子どもたちに声をかけてテラスで石ムーチーをつくる。



★仲間を意識しているので、保育教諭も仲間の一人になって会話を楽しみながら一緒に過ごす。

★困っている姿に気づいたが、あえて手伝わず様子を見る。

★Nさんがお礼を言える姿を認めると共に、助けてもらった嬉しさを言葉で表現して互いの良さに気づけるようにしていく。

★Bさんの行動を認めると共に自分の成長が感じられるような言葉かけをする。

★保育教諭も仲間の一人となって掛け合いを楽しむ。



★子どもたちの協力する姿を具体的に褒める。また、気づきを言語化し、自分の成長が感じられるようにしていく。

★一日の振り返りのとき、この姿を紹介する。また、子ども自身が話し合って決めた内容を発表するなど、他の子に伝える場を設ける。

★認めてもらえた思いに共感する。また、Bさんの考えが他の子にも伝わるよう、振り返り時間の活用や、ドキュメンテーション・ウェビングマップへの記入をしていく。

★ミージョーキーいっぱいの石ムーチーは子ども達が満足するまでテラスに置く。

(その後の姿)

- ・石ムーチーは、日に当たると葉が枯れて石が見えるようになった。するとEさんが新しい葉で包み直す。その一生懸命な姿にAさんが気づき自分の見つけた紐をあげて一緒に包む(エピソード1参照)
- ・Bさんは、早く鬼が食べに来るようにと『おいしいむーちーだよ』と書いた月桃をそばにおく。
- ・新たに月桃のゆで汁が鬼よけになることを知り皆で鬼が入りそうな場所にゆで汁をまく。

(6) 考察

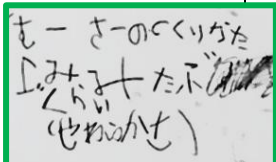
「いれて」「いいよ」などの掛け合いや、保育教諭が誰かの遊びを言葉で知らせなくとも、自然に仲間とつながり遊びを楽しむ姿をみることができた。前日に絵本という教材を通して、イメージを共有したことで、互いに何をしようとしているのかが分かり、遊びの中でつながりやすかったのではないかと考えられる。また、協力する姿や、役割分担をする姿からは、自分なりに考える力の育ちや互いを認め合える仲間関係が感じられた。仲間と楽しんだからこそ石ムーチーの置き場所を、みんなで相談する姿につながったと思う。環境とかかわり遊びが充実すると、保育教諭主体の言葉はとてま少なくなり、代わりに子どもたちの仲間として一緒に遊びを楽しむ役割が重視されると感じられる場だった。

(7) 検証保育中の連携について チーム保育で実現した環境の工夫

S 子どもの姿	→	O 読み取り	→	A 願い	→	P 環境 (○物的★人的◇空間)
・園全体の環境とつながる  ・厨房職員とつながる ・調理に使う道具を厨房へ借りに行く。 ※ガラス窓で普段から厨房の様子が見れ、皿やおかわりのやり取りを自分たちでしている。 ・砂糖の量が知りたくて厨房職員に聞く。 ・美味しくできるようになると、お礼にムーチーをあげたい子がいる。 ・小学校とつながる ・香りのある葉の名前やムーチーの作り方が知りたくて絵本の部屋で調べるが、園では見つからない。そこで小学校図書室にはあるかもしれない考えがでた。 ・借りてきた本の写真からムーチーを結ぶ紐に気づく (エピソード1 参照)。		 ・園の環境をしっかり理解している。園全体が安心して関わられる場となっている。 ・料理のことは何でも知っていると思っている。 ・厨房職員を身近に感じている。 ・立地条件とこ小連携の一環として図書室交流をおこなっていたことで、行き慣れた場所となっている。 		・子どもたちが季節の行事に興味・関心を深めてほしい。 ・いろいろな植物に興味・関心を深めてほしい。 ・厨房職員との関わりを増やし、身近にいる厨房職員の姿にも気づいて欲しい。 ・小学校の職員とかかわる機会を増やしたい。 ・就学への期待感へつなげたい。 		○◇玄関先にシンメナーペーや月桃が飾られている。 ○◇ムーチーの歌が流れている。また、方言の意味が書かれた歌詞が掲示されている。 ○園庭植物には平仮名で名前が書かれている。 ○★ボールや軽量カップなどムーチーづくりに必要な道具は予め用意し、子ども達が気づいたときに厨房職員と貸し借りのやりとりができるようにする。 ○★クラスの取り組みを事前に厨房職員に話、子どもたちから質問が来たときの対応を頼んでおく。 ★厨房職員が大匙や摺り切りの仕方を子どもたちに実演しながらわかりやすく教えてくれた。 ★「嬉しい。みんなで分けるね」と言葉をかけながら、とても嬉しそうに受け取ってくれる。 ○やり取りはドキュメンテーションへ記入しいつでも振り返られるようにする。 ★受け取ってもらえた嬉しさに共感し、もっとかかわってみたい思いへとつなげていく。 ○★◇子どもたちの姿を予想し、小学校図書司書へ活動内容を事前に伝え、図書室使用の日程調整をする。 ○子どもたちから声が出てから、図書室へ行く。 ★図書室の先生がムーチーに関係のある沖縄料理本や、由来の載っている本を事前に選んでくれた。 ★調べる楽しさに共感すると共に、小学生への憧れの気持ちや、就学への期待感へつなげていく。 ○ドキュメンテーションへ記入しいつでも振り返られるようにする。

・本を返却しながら、図書室の先生へお礼のムーチーを渡したい子がでる。 ・お礼のムーチーを作りながら、「何味が好きか聞けばよかった」「喜んでくれるかな」など相手を思う会話をしていた。 ・お礼のムーチーを作った子が図書室の先生へ手渡す。	・図書室の先生のイメージや顔がしっかり分かっている。 ・図書室の先生が優しく対応してくれた嬉しさが十分に伝わっている。	・就学への期待感を高めたい。就学への不安感を減らしたい。	★美味しいムーチーが作れるようになったあと、返却日を知らせる。 ★子どもたちと一緒に作る中で、相手を思う気持ちに共感していく。また、子どもの考えや思いを図書室の先生に伝える。 ★図書室の先生はとても喜んで、ムーチーを受け取ってくれた。また、「またおいで～」など親しみやすく、次出会う機会が楽しみになるような言葉をかけてくれた。 ★受け取ってもらえた嬉しさに共感し、もっとかかわってみたい思いへとつなげていく。
・保育教諭とつながる ・園庭で月桃探しをしているときにフリー保育教諭へ質問する。 ・紐の作り方を園長先生に質問する。(エピソード1参照) ・園庭(ドッチボール)室内(ムーチーづくり)と遊ぶ環境が分かれる。 ・自分なりの考えを伝える。 ・遊びに必要な道具を借りる。 ・美味しくできたムーチーをあげたがる。	・好きな遊びを主体的に楽しめる。 ・園のどの職員とも安心して関わっている。 ・関わりの中で自分が大切にされていると感じている。	・十分に好きな遊びを楽しんで欲しい。 ・できるだけ全職員とかかわって欲しい。 ・いろいろな職員に認めてもらう経験を増やし自信へつなげたい。	★5歳児クラスの取り組みや研究員のねらいを職員会議・週案会・隙間時間を活用し共通理解する。 ★活動の内容を事前に相談し、安全面など多面からみてもらって、環境を工夫していく。 ★担任・フリー保育教諭と声を掛け合って遊びを見守り、必要に応じて援助する。 ★子どもの思いを受け止めていく。また、子ども達とやり取りを楽しみながら、次への意欲につながるような言葉かけをしてくれる。 ★ムーチーが出来上がった嬉しさに共感し、一緒に喜んでくれる。 ○ドキュメンテーションを活用して遊びが発展する様子を伝える。
・異年齢でつながる ※普段から3・4・5歳児はよく関わって過ごすことが多い。 ・他のクラスにムーチーづくりを楽しんでいることを内緒にしたがる。 ・初めころはクラスの扉を閉めたがったが、しばらくすると3・4歳児が見に来て気にしない。 ・石ムーチーや紐づくりなどに興味があり寄ってきた子に説明する。 ・作り方や使い方を知らせと一緒に遊ぶ。	・5歳児になったからできる特別な活動と考えている。 ・ムーチーがおいしく作れるようになり、満足してきている。	・いずれは他のクラスにもかかわってほしい。	★5歳児クラスの取り組みや研究員のねらいを職員会議・週案会・隙間時間を活用し共通理解する。 ★子どもたちの思いを受け止め、内緒にする。頃合いをみて相談していく。 ★他のクラスの子が興味を持っていることや憧れの気持ちでみんなの活動をみたい思いなどを伝えていく。 ○★安全面に配慮しながら、子どもたちのかかわりを見守る。 ★分かりやすい言葉や手本など伝え方を必要に応じて知らせる。



・鬼除けとして、園内にゆで汁をまく際、未満児クラスのことを考え、2階にもまく。 ・家庭とつながる ・家庭でのムーチャーづくり経験を話す。 ・必要な月桃を家庭から持ってくる。 ・園で疑問に思ったことを家庭に持ち帰り、聞いた答えを園で伝える。 ・美味しくできたムーチャーを持ち帰りたがる。 	・自分たちですすめた遊びだから、説明できる。 ・年長という意識が育っている。  ・家庭でも伝統行事を楽しんでいる。 ・園での様子を伝えることができています。 ・自分が大切にされていると感じている。	・5歳児への憧れや下の子を思いやる気持ちを育てた。また、成長したことを感じ自信へとつなげたい。  ・園での様子家族に伝わる嬉しさや伝える楽しさを味わってほしい。 ・家庭と園でつながると遊びがより楽しくなることを知って欲しい。 ・家庭でも認められる経験を重ねてほしい。	★思いやる姿や、伝えようとする姿を認め自信へとつながるような言葉かけをしていく。 ★事前にお手紙を出し、クラスの活動内容を伝え、子ども達から声がでたときは、エプロンなどの準備をお願いする。 ○保護者用のドキュメンテーションを作り、遊びの展開が共通理解できるようにする。 ★聞いてきた内容をウェビングマップに記入し、クラスで共有する。 ★保護者に家庭で聞いてきたことがどのような遊びに繋がったか、認められた経験がどんな育ちにつながるか知らせていく。
---	--	--	---

(8) 考察

検証保育では、子ども同士だけではなく子どもたちが多方面から多様な人たちと関わる機会になっていた。また、人と関わる中で自分が大切にされていると感じることができると、その嬉しさが思いやりに変わり、「何かをあげたい」「お礼を言いたい」という気持ちにつながることも、気づくことができた。子どもの育ちを考えた環境は、このように多くの人に支えられている。だからこそ、子どもにかかわる一人一人が、子どもを大切にする姿勢とその育ちに必要環境を共通理解する必要があると感じる。このことからチーム保育が上手くいけばより安心できる環境と子どもの育ちが保障されると考えられる。

VI 研究成果と今後の課題

1 研究成果

- (1) 子どもの姿を起点とした SOAP の視点で保育を振り返ったことで、子ども理解が深まり多様な子どもたちがどう仲間とつながっているかをみることができた。またその記録を元に、子どもたちの興味・関心やその子に必要な育ちを考え環境を工夫すると、子どもたちは環境と関わる中で自然に仲間とつながり、遊びを発展させて楽しんでいた。
- (2) 子どもたちが様々な人と関わり遊びを広げる姿から、子どもにとって安心し、自己発揮して遊ぶ環境は、保育教諭や職員の子どもの大切にする姿勢や園の雰囲気など、園全体でつくられると改めて感じた。子どもの姿をどう捉え、どう育ちに必要環境をつくるかを今後も園全体で考え、共通理解し、環境づくりをしていきたい。
- (3) 本検証の当日においては、いつもと違った雰囲気であったが変わらず好きな遊びを楽しむ姿や思いのままに自己表現する姿など様々な自己発揮の姿をみる事ができた。この姿から、本園が子どもたちにとって安心できる場となっていると考察した。また、子どもが参観者に友だちの楽しんでいる遊びを説明する姿から、仲間とつながっている関係が築けていると感じた。

2 今後の課題

- (1) 子どもたちが安心して、自己発揮をしながら遊ぶ環境の工夫には、多面的に子どもの姿を捉えることや職員間で連携していく必要があり、チーム保育が必須だった。今回はドキュメンテーションを活用して共通理解を図ったが、他の方法も探っていきたい。
- (2) 子ども達が主体的に環境にかかわり、遊びを発展させていく姿から、子どもの姿を軸に環境を考える重要性を改めて学ぶことができた。今後も子どもの姿を軸に環境の工夫がおこなえるよう、自分のクラスや園に合った記録方法を活用し、保育の振り返りをおこなっていきたい。

〈主な参考文献〉

- 酒井幸子・中野圭子『みんなにやさしい インクルーシブ保育基本と実践を18の事例から考える』ナツメ社 2023年
- 大豆生田啓友・岩田恵子『役立つ!活きる!保育ドキュメンテーションの作り方』西東社 2023年
- 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園における 園児が心を寄せる環境の構成』フレーベル館 2022年
- 発達 通巻第167号『【特集】子どもに会い・語る「保育記録」』ミネルヴァ書房 2021年
- 岩立京子・西坂小百合 編著『乳幼児教育・保育シリーズ 保育内容 人間関係 第2版』光生館 2021年
- 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館 2018年
- 子どもと保育総合研究所
- 『子どもを「人間としてみる」ということ-子どもとともにある保育の原点-』ミネルヴァ書房 2013年
- 文部科学省 『幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価』ぎょうせい 2010年

〈参考文献 URL〉

- こども家庭庁 『はじめの100か月の育ちビジョン』
https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo_sodachi 2025年11月1日取得
- Circle of security international『安心の輪』
<https://www.circleofsecurityinternational.com/> 2025年11月27日取得